

# 「聞いてはダメだ」と説教する 松崎、福原



82.1.16

No. 944

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)  
(鉄電)二九三五(六・八巻) 四三二二七二〇七

## 動力車新聞「新春座談会」を怒りきり弾劾する

「動力車新聞」新年号で、富塚総評事務局長、武藤国労書記長、佐藤動労「本部」書記長、動労「本部」革マル反動分子松崎、福原らによる「新春座談会」なるものが掲載されています。この座談会で、動労「本部」革マル反動分子の最高責任者松崎、福原らは、実に腐り切った反労働者の体質・路線をあけすけに暴露しています。われわれは、闘う動労の伝統をここまで汚し食いつぶしてきている彼ら革マル反動分子を全労働者の敵として満腔の怒りをもって断罪すると共に、今こそ動労大改革を更に一層力強くかちとっていかうではありませんか。

### 三五体制を擁護し、職場からの反撃をおしつぶす松崎

松崎、福原はこの座談会の中で、まず第一に「国鉄経営問題」に関して、次のように述べています。

松崎は、「：権力者側の意に沿う国鉄と国鉄労働者——その道以外は一切許さないのでという攻撃だと思ふんです」と敵の攻撃の厳しさを訴え、これに対して、「：『おれの職場の問題』『おれの支部の問題』『おれの労働組合の問題』とかいうふうには、お家騒動に拍車をかけるようになるのは実にばかばかしい」と言い切っているのです。

つまり、敵が軍事大国化・改憲にむけた国鉄づくり、国鉄労働運動解体攻撃を全面化させ、職場生産点での既得権のヘク奪・攻防が焦点化しているその時に、「情勢は厳しい、冬の時代だから、これと対決して闘うのは職場セクト主義ではかばかしい」といって、現場労働者の一切の闘いを否定し禁圧してまわっているのです。

続けて福原は、「今まで動労が闘ってきた絶対反対の反合理化闘争はどこへいったんだ、闘いなしに済ませる気なのか」という意見(当然だ!)が、他ならぬ動労「本部」中央委員会で出され、動労「本部」組合員の怒りが充満している事実を認めたいうえで、職場の労働者の切実な意見を無残に切りすてているのです。

### 「大衆蔑視の本質」を満展開

福原いわく——「おそらく職場の労働者は、今までの攻撃とそれに対する動労の闘いという(古い)イメージから、今日の攻撃に対しても抜けきれていない」などと、「助士廃止反対闘争を闘った時とは状況がちがうんだ」「下部の労働者は何もわかっていない」と、冷やかにいい放ち、ここでも大衆蔑視の本領を発揮しています。

さらに、「状況の認識というものをまずしなく

てはならないんだと、そういうところに相当力量を置いて意志統一をはかったわけです」と、動労「本部」の闘争放棄し裏切りに抗議し「今こそ闘うべきだ」との良心的部分の意見を強引にねじ伏せ、圧殺してきた事実を公言してはばからないのです。

### 鉄労に学んで、ついに「経営参加」を叫び始めた松崎

そして松崎は、ついに「国鉄経営に参加」という決定的発言を行なっています。

「：：他方で労働者が経営問題とまったくはずれてやっいていけるのかということ、内部的にはもうちよつと議論を進めていく」としたうえで、「職場闘争をやっいていけば何とかなるんだという、目先で考えていくような国鉄問題の立論の仕方というものを転換させていかなきゃならない」「：われわれの政策を考える」「赤字はおれらがつくったんじゃないから知らないよじゃどうにもならない」とい、ついに「：労働組合の側も国民から信頼されるフロント精神というか、営業の責任をもてとはいわないまでも、：」と、言葉尻を濁しながらも明確に「労働組合も赤字問題に責任をもつて経営に参加すべきだ」と主張するに至ったのです。怒りなくしてこの言葉を聞くことが一体できるだろうか! 何がフロント精神! これこそ、われわれが動労の真価をかけて徹底対決してきたところの、まぎれもない鉄労根性! そのものではないか。

### 闘わない事を合理化し、闘う部分を襲撃する動労「本部」革マル

動労「本部」革マルは、「冬の時代」「だから闘わない」として、武操合理化や乗務員運用合理化という一大攻撃に対する闘いを、「地方課題だ」と強弁して放棄し裏切つてきました。そして「貨物安定宣言」によって動力車職場の武装解除をはかり、今日、次々と合理化攻撃に屈服し、35体制の先兵、右翼労働「統一」の先兵となりはてています。闘わない事を合理化し、逆に、組合員の闘いへの決起を弾圧し、わが動労千葉を先頭とする全国の良心的な闘う部分への襲撃—解体を策動しているのが実態です。

今こそ、松崎を先頭とする「本部」革マル分子を動労から追放し、動労大改革を一層推進しようではありませんか。